

母親の育児行為の解釈に関する研究  
—育児についての語りにおける「虐待認識」に着目して—

A study of mother's behavior in parenting  
—Focus on the awareness of “child abuse” in mother's monologue—

内山彩織（教育学領域）

## 1. 問題の所在

近年、虐待に対する社会の「まなざし」が厳しくなっている。その背景には、児童相談所における虐待相談の処理件数が、「児童虐待過去最多」という見出しのもとで報道されていることがあると考えられる。しかし、平成16年の児童虐待の防止等に関する法律の改正によって、「虐待を発見した場合」だけではなく、「虐待と疑われるもの」の通告が義務化されたため、その件数には、同一の家庭に関するものや、児童相談所に通告があったものの、実際の調査で虐待と判断されなかったものも含まれてしまう。その件数を「児童虐待過去最多」と報道することで、虐待の相談件数と発生件数の混同が生じ、虐待が増えているという不確かな認識が流布されることとなり、虐待に対する社会の「まなざし」がより強化されたのではないだろうか。そういった中で、育児をする母親は、その「まなざし」を受け、自身の育児行為を解釈していると考えられる。

これまでの虐待に対する認識の研究では、「社会」の「まなざし」と「母親」の認識に関心が向けられてきた。「虐待」は、その言葉が社会に浸透していくことによって、育児家庭、とりわけ母親がもつ「虐待リスク」の有無を判断するという形で構築され、母親は、虐待に対する社会の「まなざし」に「受容」か抵抗という2つのうちのどちらの立場で応じて自身の育児行為を解釈し、問題の解決に向かっている。しかし、多くの母親がそういった形で問題を解決するのだろうか。一度は立場を定めるものの、なんらかのきっかけで解釈に揺らぎが生じることは十分にあり得る。また、「虐待リスク」の発見を主眼に置き、虐待の「早期発見・早期対応」を目指す育児支援は、母親の育児不安に対応し、虐待の深刻化を

防ぐものとして十分に機能しているのだろうか。

そうした観点から、本研究は、母親の育児についての語りに着目して、現行の行政機関の育児支援と実際に母親が求めている支援との不一致を示し、その不一致が行政機関の育児支援への不信感に繋がっている可能性を検討することと、そういった環境の中で子育てをする母親の育児行為の解釈が、「虐待」と「しつけ」との認識の間で揺れ動く様子を描き出すことを目的とした。

## 2. 論文構成

### 序章 課題の設定

#### 第1章 虐待の認識

##### 第1節 構築される「虐待」

##### 第2節 「まなざし」を受ける母親

#### 第2章 愛知県における虐待への対応

##### 第1節 児童相談所での虐待対応

##### 第2節 「早期発見・早期対応」のモデルとしての愛知

#### 第3章 母親の語りにもみる育児行為の解釈

##### 第1節 調査の概要

##### 第2節 虐待イメージと育児観

##### 第3節 他者からの指摘による不安

—「子どもの髪を掴む」という行為—

##### 第4節 育児行為に対する不安

—「子どもを放置する」という行為—

### 終章 まとめと今後の課題

## 3. 論文概要

### 第1章 虐待の認識

これまでの虐待の認識に関する研究は、虐待に対

する社会の「まなざし」を扱った研究が主流であった。内田（2009）は、相談件数は虐待の発生件数ではなく、「発見＝発明＝構築」数であるとし、虐待に対する「まなざし」による虐待の構築を指摘した。また、田中（2011）は、しつけとの境界線が曖昧になった「児童虐待」という用語が社会に浸透することで、家庭内のしつけ・養育態度に向けられる視線が厳しくなったと論じ、育児家庭に対する国家の管理・監視の強化への懸念を示した。上野（1996；2003）、野村（2003）も述べているように、育児に対する社会の「まなざし」の厳しさが「虐待」をつくり出しており、虐待に対する不安をさらに増幅させている可能性がある。「虐待」は、そういった社会の中で、その言葉が社会に浸透していくことによって、都市を主導として全国的に発見されるようになり、その要因を経済的要因から家族病理に起因するものへと移行させた。そして、「虐待リスク」をもつ育児家庭、とりわけ母親への国家の管理・監視を強めながら、リスク項目の有無を判断するという形で構築されるようになったのである。

その一方で、虐待に対する母親の「認識」にも研究の関心が向けられている。横山ほか（2011）は、母親への質問紙調査から、母親の「虐待認識」には、母親のもつ「虐待リスク」が関連していると述べた。質問紙という調査の制約上、事前に調査設計者の視点が想定されているため、母親の認識がすくい取れていない可能性があるが、「虐待リスク」を抱える母親の中に、自分の育児行為を虐待だと認識する母親が少なからずいることを明らかにした。また、記者の保坂（2005〔1999〕）は、母親へのインタビューを通して母親のもつ「虐待」の認識を描き出した。そこでは、母親が自身の育児への周囲の「虐待」だという指摘を受け入れ、自身の子どもに対する行為を虐待であると認識したことで、問題解決に向かう局面を生み出したことが示されていた。内田（2009）は、保坂の事例に対して、虐待の「認識」が母親の状況の改善をもたらしているため、「虐待である」という認識について検討すべき「問題」はないとし、援助活動における「虐待」という言葉が母親に及ぼす否定的影響を提示した。「虐待」という言葉の残酷な印象によって、母親が自身の行為を「虐待」とあると定義することに抵抗することを示したのである。そして、そういった「虐待」という定義のもとでの援助活動は、母親の自身への責めの増幅や、拒否感や違和感を生み出すことに繋がるとし、援助者全体、社会全体の取り組みにおいて、「虐待」の意味を援助に効果的なものへ再定義することの必要性を指摘した。

これまでの研究においては、母親が虐待に対する社会の「まなざし」に「受容」か抵抗という2つの

うちのどちらの立場で応じて自身の育児行為を解釈し、問題の解決に向かうかということを論じていた。しかし、多くの母親がそういった形で問題を解決するのだろうか。また、一度は立場を定めるものの、なんらかのきっかけで解釈に揺らぎが生じることは十分にあり得る。つまり、母親の育児行為の解釈が「虐待」と「しつけ」との認識の間で揺れ動く可能性があるのではないか。こうした観点からの研究は、十分行われてこなかったように思われる。

## 第2章 愛知県における虐待への対応

現在の育児支援は、虐待の「早期発見・早期対応」を目指すことによって母親の育児不安に対応し、虐待の深刻化を防ぐことを重要視している。特に、愛知県では、児童相談所での「赤ちゃん縁組」の取り組みが「愛知方式」とよばれるほど、全国に先立った虐待対応がされていると考えられる。

虐待対応について、厚生労働省は「子ども虐待対応の手引き」を定め、児童相談所や関係機関での対応の強化を図っている。「子ども虐待対応の手引き」において、虐待は、「子どもの心身の成長及び人格の形成に重大な影響を与えるとともに、次の世代に引き継がれるおそれのあるものであり、子どもに対する最も重大な権利侵害である」とされている。虐待は、目に見える子どもの外傷だけではなく、子どもの内面にまで影響を与え、虐待を受けている子どもから、その子どもへと連鎖する可能性のあるものとして捉えられているのである。また、虐待から子どもを守り、子どもが心身ともに健全に成長し、社会的自立に至るまでの支援を子ども虐待防止対策の目標としており、早期発見や子どもの適切な保護を図るために、「子どもの権利擁護」に努め、関係機関の連携の下で対応していくことが重要だとされている。現在の児童相談所では、全国的に虐待の「早期発見・早期対応」を目的とし、「子ども虐待対応の手引き」の「発生子防」、「通告・相談への対応」、「一時保護」、「援助」の4項目を虐待対応の要として、親に自分の子どもの養育環境に問題があることを自覚させ、それを改善していくことで、虐待の深刻化や再発を防ぐことを目指した育児支援が行われている。

そうした虐待対応が行われた結果、近年の被害児童数は増加傾向にあるものの、死亡数はピークを迎えた平成20年と比較すると、半分程度に減少している。これは、児童相談所の虐待の「早期発見・早期対応」を目的とした育児支援の成果であると考えられる。その中において、愛知県では、産みの親が育てることのできない子どもを、特別養子縁組を前提とした里親委託によって、生まれてすぐに家庭の中で育てる取り組みである「赤ちゃん縁組」が定着

し、育児支援が、虐待の「早期発見・早期対応」を目的とするものから「未然防止」を目的とするものへと移行するほどにもなっている。この「赤ちゃん縁組」は虐待死の中で最も多い0歳0ヶ月0日の虐待死を防ぐ方法として注目され、「愛知方式」として全国の児童相談所の虐待対応のモデルとなり、全国的に拡大する兆しをみせている。

### 第3章 母親の語りにみる育児行為の解釈

#### (1) 調査の概要

本研究で扱う調査対象者は、名古屋市A区在住の2人の男児を育てるユカさん（仮名）である。ユカさんの家庭は、夫であるタツミさん（仮名）と、12歳のハルマくん（仮名）、4歳のアキトくん（仮名）の4人家族で、タツミさんは作業員として週6日働き、ユカさん自身も、週に5～6日ほどパートをしている。ユカさんは、6年前に次男であるタケルくん（仮名）を突然死で亡くしており、その際、警察によって虐待者の疑いをかけられ、病院からも死因の究明のために病理解剖を勧められたという経験をもつ。警察による捜査の結果、タケルくんの死に事件性はなく、虐待による死亡ではなかったと判断され、病理解剖においても、虐待と思わしき所見は認められない突然死であったとの診断が下った。しかし、他者から虐待者であると疑われたという経験が、その後のユカさんの育児観に反映されている可能性がある。また、三男のアキトくんは、発達障がいであるとの診断を受けており、そのことがユカさんに育てにくさを感じさせ、育児行為の解釈に大きな影響を与えていると考えられるため、今回の調査への協力を打診した。その際、対象者には本研究の目的や内容を伝えている。

調査は、2015年10月上旬と下旬に1回ずつの計2回にわたって実施された。第1回調査と第2回調査の間は約1ヶ月あり、その期間に生じた対象者の育児についての考えの変化を捉える。第1回調査では「しつけと虐待との境界線」「対象者自身の育児」「行政機関の育児支援」など、第2回調査では「子どもを亡くした経験」「その後の対象者自身の育児」などを主な質問項目の軸とし、ある程度自由に語ってもらうというオープン・クエスチョンを用いた。調査時間は第1回調査が約2時間40分、第2回調査が約3時間20分の合計約6時間で、実施場所はいずれも、対象者の自宅である。対象者の了承を得て録音したインタビュー内容は、文章化した後に対象者のもとにフィードバックし、必要があれば訂正とコメントをもらうようにした。また、インタビュー後もメールのやりとりを通して、内容を付け加えてもらった。インタビュー内容は、対象者の了承を得た上で、分析に用いている。

#### (2) 虐待イメージと育児観

母親の育児行為の解釈には、自身のもつ虐待のイメージや育児観が反映されていると考えられる。調査対象者のユカさんは、虐待についてどのようなイメージをもち、どういった育児観をもって日々の育児と向き合っているのだろうか。育児行為の解釈が「虐待」と「しつけ」との認識の間で揺れ動く様子を描く前に、まずはその点について示す。

ユカさんは、サトルくんを幼い頃に亡くしており、その際に虐待者であると疑われた経験をもつ。また、アキトくんは発達障がいであるとの診断を受けており、そのことがユカさんに育てにくさを感じさせていると考えられる。これらのことから、ユカさんのもつ虐待イメージと育児観は、①サトルくんを亡くしたこと、②ユカさんの子どもの頃の経験、③アキトくんの個性という3つの要素が関連し合い、「虐待は、家庭の状況を知らない他者が決めつけるもの」という虐待イメージと、「子どもに教えないことは「虐待」であり、厳しく教えることは「しつけ」である」という育児観を形成していた。

また、現行の児童相談所の育児支援について、虐待ではなく虐待死を防止するためのものだと感じており、自分の抱える育児に対する不安や困難を解決してくれるものではないと捉えていた。ユカさんが求めているのは、母親からの電話相談や、通告があつてからの家庭訪問ではなく、行政機関の職員が継続的に家庭訪問することであり、そうすることによって虐待が減るとも考え、現行の虐待の防止活動への疑問も感じていた。現行の行政機関の育児支援は、母親が求める育児支援と必ずしも一致せず、育児支援といいながらも、自分に必要な支援はしてもらえないという不信感を募らせることに繋がっていると考えられる。

#### (3) 他者からの指摘による不安

ユカさんは、自分の育児を振り返ったときに、虐待だったのではないかと感じる行為として、「急に走り出したアキトくんの髪を掴んだこと」と「家を飛び出していったアキトくんを追いかけずに放置したこと」の2つを挙げた。これらの行為については、インタビュー中に何度も繰り返し語られており、その都度、自身の捉え直しが行われていたと考えられる。

ユカさんは、「髪を掴む」行為をアキトくんの安全を守るための「しつけ」であると解釈していた。しかし、その解釈は、夫であるタツミさんやユカさんの親といった身近な他者からの「虐待だ」という指摘をきっかけに「虐待」と「しつけ」との認識の間で揺れ動く。それは、自分にとって身近な、日々の生活の理解者であるはずの家族から思いがけず

指摘を受けたことで、家族のことばを周囲の人びとの「まなざし」のように感じ、これまでは意識されていなかった周囲の人びとから、自身の行為を虐待だと疑われることへの不安が生じたからであると考えられる。しかし、ユカさんは自身の育児行為に「子どもの成長に繋がった」という正当性を見出し、育児行為の解釈が「虐待」に至らないようにしていた。だが、その正当性は誰しもにとって妥当なものであるとはいえず、今後も身近な他者からの指摘によって、解釈が揺れ動く可能性がある。

#### (4) 育児行為に対する不安

ユカさんは、「放置する行為」については、他者からの指摘を受けずとも、周囲の人びとから虐待だと疑われるのではないかと感じていた。それは、身近な他者からの「髪を掴む」行為への指摘をきっかけに、周囲の人びとの「まなざし」を意識するようになり、そのほかの行為に対しても自身で疑いの目を向けるようになったためだと考えられる。つまり、「放置する」行為に対しては、対象者が自分自身で揺れ動きを生じさせたということである。

このように、対象者は、身近な他者からの指摘をきっかけに、周囲の人びとの「まなざし」を意識するようになり、自身の育児行為を虐待だと疑われることへの不安を生じさせた。そして、その不安によって自分自身を規定し、自分で自身の育児行為に監視の目を向けることで新たに生み出した「不安」を抱えて育児と向き合っているのではないだろうか。

#### 終章 まとめと今後の課題

本研究では、「急に走り出したアキトくんの髪を掴んだこと」「家を飛び出していったアキトくんを追いかけて放置したこと」という2つの行為の語りの分析を通して、2つの知見を得ることができた。

まず、1つめは、現行の行政機関の育児支援と母親の求める育児支援は必ずしも一致せず、その不一致が母親の育児支援に対する不信感に繋がっているということである。先に述べたように、現在の虐待の「早期発見・早期対応」を目指す行政機関の育児支援は、「愛知方式」とよばれる「赤ちゃん縁組」をモデルに、子どもの安全に照準を合わせ、母親のもつ「虐待リスク」をなくすことで、虐待を未然に防止するものへと移行しようとしている。一方の母親は、行政機関の職員が継続的に家庭に訪問することで職員との信頼関係を築き、相談しやすい環境をつくることを求めている。また、現在の行政機関の虐待対応について、虐待ではなく虐待死を防ぐためのもので、自分の抱える子育てに対する不安や困難を解決してくれるものではないと捉えており、その取り組みに疑問を感じている様子もあった。育児支

援の受容と供給に関して、両者は必ずしも一致しておらず、必要な支援はしてもらえないという母親の不信感に繋がっているといえる。このように母親に必要なとする育児支援が行き届かない背景には、育児支援についての行政機関の論理と母親の論理にずれ違いが生じているからだと考えられる。

そして、2つめは、母親は自身の育児行為の解釈によって、自己の中で「不安」を増幅させている可能性があるということである。母親の育児行為の解釈は、夫や自分の親といった身近な他者からの指摘によって「虐待」と「しつけ」との認識の間で揺れ動き、その行為に対する不安が生じさせていた。そして、その不安によって、自分で自身のほかの行為を「虐待」ではないかと感じるようになり、他者からの指摘を受けずとも解釈が揺れ動くようになった。つまり、1つの行為に対する周囲からの「まなざし」を受けて自分を規定し、自分で自身の育児行為を監視するようになったのである。ここには、1つの行為に対する不安が新たな不安を生み、母親が自身で「育児不安」をつくり出す過程がみられ、自己の中で「不安」を増幅させているということが示唆される。これまでの研究では、母親は虐待に対する社会の「まなざし」を「受容」するばかりではなく、抵抗することで問題解決に向かうことがあると論じられた。しかし、母親の育児行為の解釈は、抵抗を示すことで帰結するわけではなく、その後も育児行為の解釈は揺れ動く可能性がある。

#### 4. 参考文献

- 保坂渉 1999, 『虐待—沈黙を破った母親たち』, 岩波書店。(本研究が参考にしたのは、2005年に岩波現代文庫より出版された文庫版である。)
- 田中理絵 2011, 「社会問題としての児童虐待—子ども家族への監視・管理の強化—」『教育社会学研究』第88集, 119-138頁。
- 上野加代子 1996, 『児童虐待の社会学』, 世界思想社。
- 上野加代子・野村知二 2003, 『＜児童虐待＞の構築—捕獲される家族』, 世界思想社。
- 内田良 2009, 『「児童虐待」へのまなざし—社会現象はどう語られるのか』, 世界思想社。
- 矢満田篤二・萬屋育子 2015, 『「赤ちゃん縁組」で虐待死をなくす 愛知方式がつかないだ命』, 光文社新書。
- 横山美江・岡崎綾乃・杉本昌子・小田照美・塚本聡子・水上健治・菌潤 2011, 「乳児から小学生の子どもをもつ母親の虐待認識についての検討」『日本公衆衛生雑誌』第58巻第1号, 30-39頁。